『源氏物語』以後の「かすみ」「かすむ」について

平井一博*

目　次

１．はじめに
２．『源氏物語』以後①　荼毘の煙・神仙世界
３．『源氏物語』以後②　いぶせき思い
４．おわりに

１．はじめに

春を代表する景物の一つである霞は、一般に駘蕩としてのどかな風景を形作るものという印象があると思われる。しかし実際にその具体例を検討してみると、必ずしもそうとは言い切れぬ種々相があることは以前に指摘した[1)]。論を進める都合上、以下にその要点をまとめて確認しておきたいと思う。

なお、名詞「かすみ」と動詞「かすむ」を同次元に扱ってよいかという点については当然考慮しなければならないが、これも以前に指摘した通り、管見の限りでは、どちらも春以外の季節にものがぼんやり見えるという、いわば一般的な用法で用いられている例は見当たらぬようである。どちらも春という季節に限定して現れ、しかも両者の間に現象面での明確な違いは認めにくいという理由により、暫く同列に扱うこととしたい。

「かすみ」には通常「霞」の漢字を宛てるが、中国漢詩文中の「霞(カ)」と和語「か

*　培材大学校 日本学科 専任講師

1) 拙稿「『源氏物語』の「かすみ」「かすむ」について」(『日本文化学報』28輯、韓国日本文化学会、2006)

www.kci.go.kr

すみ」は各々別個の現象を指し、日本では漢詩文と和文とに於いてそれぞれ別々に受容されていることについては夙に小島憲之氏が指摘されている2)。このうち和語「かすみ」の基本的なイメージや属性は

1、春の代表的な景物(秋の「霧」に対応する)

2、立春の景物

3、うららかな光景をかたどる景物

4、物(花など)を隠すもの

というところであろう3)。歌語としての、即ち和歌世界に於ける「かすみ」にはこれらを大きく逸脱するような用法はあまり見られないようである4)。僅かに火葬の煙を霞に見立てる例が散見するが、これについては次章で触れることとする。

ところが散文の領域では必ずしもこの範疇に収まり切らぬものが散見する。例えば、小学館『日本国語大辞典』では「霞」の項の①として「空気中に広がった微細な水滴やちりが原因で、空や遠景がぼんやりする現象。また、霧やけむりがある高さにただよって、薄い帯のように見える現象。比喩的に、心の悩み、わだかまりなどをいうこともある。」とする。例として挙げられているもののうち、下線部に該当するものは恐らく後述の『源氏物語』須磨巻の例であろう。こういった用法は和歌世界の表現の中ではあまり見られないものであり、これまでも特に注意されてこなかった。現に角川書店『古語大辞典』や小学館『古語大辞典』はこのような用法を採っていない5)。

そこで、先の拙稿では霞の用法を

A：春の訪れ（立春・早春）を告げるもの

B：（早春に限らず）春の美しい風景を描写するためのもの

C：何かを隔てるもの、立ち隠すもの

D：文飾・引歌として用いられているもの

E：上記A～Dに当てはまらぬもの

に再分類し、『源氏物語』とそれ以前の作品における「かすみ」「かすむ」の用例について検討した。A～Cは当然ながら『源氏物語』中でも最も多い用法であるが、先述の通り一般的な用法の範疇に入るものであるから、ここで改めて繰り返し述べる必要はあるまい。Dはレトリックとしての用法であり、それはそれで散文の文章表現のあり方として十分に研究に値するものであるとは思われるが、先の拙稿及び本稿の志向するところとは違うのでこれも割愛する。筆者が特に注目したのはこれらに当てはまらぬもの、即ちEの例である。

2) 小島憲之「上代に於ける詩と歌―「霞（カ）と霞（かすみ）」をめぐって―」（『万葉学論攷』続群書類従完成会、1990）

3) 秋山虔編『王朝語辞典』（東京大学出版会、2000）

4) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』（角川書店、1983）

5) ちなみに、『日本国語大辞典』でもこのような用法に言及するのは近年出版された第二版からであり、旧版では触れられていない。

www.kci.go.kr

私見によれば、Ｅにはまず神仙世界との関連を示す例がある。先行作品としては『宇津保物語』に、俊蔭が天人と出会い秘琴を伝授される場面、

俊蔭、清く涼しき林にひとりながめて、琴の音をあるかぎりかきたてて遊ぶに、三年といふ年の春、この山より西にあたる花園に移りて、琴ども並べ置きて、大きなる花の木の陰に宿りて、わが国のこと、父母のこと思ひやりつつ、声まさりたる二つの琴を試みる。春の日のどかなるに、山を見れば霞みどりに、林を見れば木の芽けぶりて、花園花盛りにおもしろく、照る日の午時ばかりに、琴の音をかきたて、声ふりたてて遊ぶときに、大空に音声楽して、紫の雲に乗れる天人、七人つれて下りたまふ。（宇津保物語、俊蔭、①p29）[6]

があるが、『源氏物語』ではここまであからさまな例はなく、せいぜい

舞ひはつるほどに、大臣、院に御土器まゐりたまふ。
　　鶯のさへづる声はむかしにてむつれし花のかげぞかはれる
院の上、
　　九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくる鶯の声（源氏物語、少女、③p268）[7]

のように、院の御所（仙洞御所）を仙人の住処に準え、朱雀院が自らの居所を「九重のかすみ隔つるすみか」と言っている例があるくらいである。もっとも、先の分類上Ａ～Ｃに入るもののうちでも源氏の住まう二条院・六条院や若紫巻における春の北山など、別世界とも言うべき場所の美しさを描写する部分に現れる「霞」は、この延長線上にあるものとして捉え得るものであるかもしれない。

それよりも注目すべきものとして先に拙稿で指摘したのは、いわば「暗色の霞」とでも言うべき例である。この先蹤は既に『蜻蛉日記』に見られる。

かの語らひけることの筋もぞ、この文にある。かつは思ひやるここちもいとあはれなり。よろづ書き書きて、「霞にたちこめられて、筆の立ちども知られねばあやし」とあるも、げにとおぼえたり。（蜻蛉日記、下、天禄三年、p283）[8]

十五日、儺火あり。大夫の雑色のをのこども、「儺火す」とて騒ぐを聞けば、やうやう酔ひすぎて、「あなかまや」などいふ声きこゆる、をかしさに、やをら、端のかたに立ち出でて見出だしたれば、月いとをかしかりけり。東ざまにうち見やりたれば、山霞みわたりて、いとほのかに、心すごし。柱に寄り立ちて、思はぬ山なく思ひ立てれば、八月より絶えにし人、はかなくて正月にぞなりぬるかしとおぼゆるままに、涙ぞさくりもよよにこぼるる。（蜻蛉日記、下、天延二年、p321）

6）『宇津保物語』引用は新編日本古典文学全集(小学館)により、巻数と頁数を示す。以下同じ。
7）『源氏物語』引用は新潮日本古典集成(新潮社)により、巻数と頁数を示す。以下同じ。
8）『蜻蛉日記』引用は新編日本古典文学全集(小学館)による。以下同じ。

www.kci.go.kr

前者はかつて夫兼家が源兼忠女に生ませた娘を養女として引き取るに当たり、その兼忠女と文のやり取りをする場面である。生活不如意な折から娘の幸運を喜びつつも悲しみを抑えきれない兼忠女のやるせない気持ちを「霞にたちこめられて」と言っている。後者は五ヶ月余りも夫兼家に打ち捨てられたような状態に置かれている筆者が、絶望と諦めの思いで眺める「霞みわた」った景色を「いとほのか」なだけでなく「心すごし」と評している。これは悲しみにくれるいぶせき思いの心象風景となっていると言い得るものなのではなかろうか。この系譜に連なるものとして、『源氏物語』からは次の五例が指摘できる。

うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外の心地するに、櫂の雫もたへがたし。
　　ふる里を峰の霞はへだつれどながむる空は同じ雲居か
つらからぬものなくなむ。（源氏物語、須磨、②p225）

源氏が流謫の地、須磨に赴く場面。この例は和歌中に「へだつれど」とあるので前記分類ではＣに入るべきものだが、流離の愁いを抱きつつ、霞の向こうに見えぬ都を見ようとするこの例では、霞は決して美しさやのどかさを表してはいまい。むしろやるせなくいぶせき思いの心象表現と取り得る例とも考えられる。先述した通り、『日本国語大辞典』が「比喩的に、心の悩み、わだかまりなどをいうこともある」として挙げているのがこの例であることとも考え合わせたい。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ。この御畳紙に、
　木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの衣着たる春かな
大将の君、
　亡き人も思はざりけむうちすてて夕のかすみ君着たれとは
弁の君、
　うらめしやかすみの衣たれ着よと春よりさきに花の散りけむ（源氏物語、柏木、⑤p311）

これは柏木の死を嘆く場面である。ここでの霞はもはや白いものですらなく、喪服と同じ色に霞んだ空は、大事な人を失った者たちの心象とそのまま重なるものである。また、和歌中の「霞の衣」は「かすみ」に「すみ」を掛けて喪服（墨染の衣）を指すと説明されるが、そもそも歌語「霞の衣」は、『古今集』以来の伝統では次のように霞そのものを指す。

　　題しらず
はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ（古今和歌集、巻一、二十三、在原行平朝臣）[9]

9）『古今和歌集』引用は新編国歌大観（角川書店）による。以下同じ。

www.kci.go.kr

「霞の衣」が墨染の衣を指すという用法は『源氏物語』以前に確例が見当たらぬようである10)。それならばより一層に一般的な用法からは離れたものであると言えよう。

こまやかなる御物語どもになりては、かの山里の御事をぞ、まづは、「いかに」と宮は聞こえたまふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、をりをりにつけて、あはれにもをかしくも、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞こえ出でたまふに、まして、さばかり色めかしく、涙もろなる御癖は、人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる。空のけしきも、また、げにぞあはれ知り顔に霞みわたれる。（源氏物語、早蕨、⑦p129）

薫と匂宮が亡き大君のことを語る場面。ここでの「空のけしき」が「あはれ知り顔に霞みわた」っているという描写は、「あはれ知り顔に」という部分が如実に示している通り、まさに悲しみの心象表現として機能していると考えてよいであろう。

……いと若やかなる手にて、
　おぼつかなくて年も暮れはべりにける。山里のいぶせさこそ、峰の霞も絶え間なくて。
とて、端に、「これも若宮の御前に。あやしうはべるめれど」と書きたり。（浮舟、⑧p16）

これは宇治の浮舟の許から姉中の君に届けられた文である。山深い里で一人過ごす「いぶせ」き思いを自ら「霞」に喩えている。

山のかたは霞隔てて、寒き州崎に立てるかささぎの姿も、所からはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるるに、柴積み舟の所々に行きちがひたるなど、ほかにて目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、なほそのかみのことのただ今のここちして、いとかからぬ人を見かはしたらむだに、めづらしき仲のあはれ多かるべきほどなり。（浮舟、⑧p47）

亡き大君を思う薫、その薫と匂宮との間で揺れる浮舟。寄り添いながらも全く別々の思いの中にいる二人である。この二人が見つめる宇治川の景色の、荒涼とした雰囲気を描く道具立ての一つとして霞が用いられている。そしてこの荒涼とした雰囲気は、紛れもなく彼らの荒涼とした心象と重なるものとして描かれているのであろう。

即ち、「かすみ」「かすむ」という語は必ずしも春ののどかさや美しさを描写するだけのものではなく、いぶせき思いの喩えとしたり、そのような感情を吐露する場面に配したりもし得る広がりを持っている。少くとも、そのように用いても不調和を来たさないものであるということが確認できたであろう。以上が先の拙稿の要点である。

10)横井孝「『源氏物語』の表現・断章―「霞の衣」を中心に―」（『静岡大学教育学部研究報告』37、1987）

www.kci.go.kr

では『源氏物語』より後に成立した散文作品にもこのような様相が見られるのであろうか。次節以下でその検証の結果を整理してゆくこととしたい。

2．『源氏物語』以後① 荼毘の煙・神仙世界

『源氏物語』以後の作品の中でまず目立つのは、荼毘の煙（火葬の煙）を「霞」に見立てる例である。これは、既に和歌に於いては『万葉集』に大伴家持の亡妻挽歌として

（「悲緒未だ息まず、更に作りし歌五首」の四）
佐保山にたなびく霞見るごとに妹を思ひ出で泣かぬ日はなし（万葉集、巻三、四七三）[11]

があり、また『古今集』にも

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを、いくばくもあらで女みこの身まかりにける時に、かのみこすみける帳のかたびらのひもにふみをゆひつけたりけるをとりて見れば、むかしのてにてこのうたをなむかきつけたりける
よみ人しらず
かずかずに我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ（古今和歌集、巻十六、哀傷、八五七）

の例があるが、『源氏物語』までの散文作品にはあまり例を見ぬ表現である。僅かに『宇津保物語』中の長歌に

……空行く雲の　よそにても　ありやと問はば　深草の　峰の霞と　ならましや　なほたらちめを　思ふには　眺めて暮らす　春の日の　日暮らしまでに　立つ塵の　数も数には　あらずもあるかな
とて、嘆きわたりたまふ。（宇津保物語、菊の宴、②p73）

の例が見られる程度だが、『狭衣物語』には狭衣自身の言葉として

「いさや、世にありはつまじき夢を見しかば、もののみ心細くて、さやうのことはいかにも思ひ寄らぬを、まいて行く末までの御後見にこそは思しめすらんに、たちまちの我が身の喜びをのみ思ひて、心苦しき御事もやと、人知れずものあはれにおぼゆるなり。あやしくもながらへてつかうまつらんこそは、本意ありても思しめされめ、霞まん空の名残ばかりにてやと思ひはべる。大臣などは、ひとへにひがひがしきやうに、思しのたまはする」（狭衣物語、巻二、①p182）[12]

11）『万葉集』引用は新日本古典文学大系（岩波書店）による。
12）『狭衣物語』引用は新編日本古典文学全集(小学館)により、巻数と頁数を示す。以下同じ。

www.kci.go.kr

の例がある。自分は憂きこと多くどうせ長生きできぬ身、結婚などしても火葬の煙を後に残すことになるだけだ、というのである。これを初めとして、散文にも次のようにしばしばこの用法が見られることとなる。

亡き人の煙はそれと見えねどもなべて雲居のむつましきかな

霞まん空は見るべきものとも思はず、ほどなくありありて、立ち昇りけんむなしき空は、恨めしさも恋しさもさまざまに、なかなかなる心地すべければ、跡の白波をだにゆかしがりたまひしかば、まいて真木柱の数にもいかでかと思すなるべし。（狭衣物語、巻三、②p54）

これは亡き飛鳥井の女君を偲ぶ狭衣の姿。また次の例は、その飛鳥井の女君の絵日記と歌を見て感慨に耽る狭衣の詠歌である。

長らへてあらば逢ふ世も待つべきに命はつきぬ人はとひ来ず

消えはてて煙は空にかすむとも雲のけしきを我と知らじな

などあるを、御覧じ果つるままに、さくりもよよとかや、乱りがはしき涙のけしきを、中将が近うて聞くらんことも、余り心弱きやうなれば、思しつゝめど、泣くより外のことなし。

霞めよな思ひ消えなむ煙にも立ちをくれてはくゆらざらまし

落ちたぎる涙の水脈は早けれど過ぎにし方にかへりやはする（狭衣物語、巻四、②p400・401）

次に『栄花物語』であるが、この作品ではすべて皇族の死に際して用いられている。一例目は円融上皇。詠者の「閑院の左大将」は藤原朝光である。

かくてこの円融院の御葬送、紫野にてせさせたまふ。そのほどの御有様思ひやるべし。ひととせの御子の日に、このわたりのいみじうめでたかりしはやと、思し出づるも、あはれに悲しければ、閑院の左大将、

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になして見んとは（栄花物語、巻四　みはてぬゆめ、①p181）[13]

二例目は皇后定子の葬送に際して。「内」は無論一条天皇である。

内には、今宵ぞかしと思しめしやりて、よもすがら御殿籠らず思ほし明かさせたまひて、御袖の氷もところせく思しめされて、世の常の御有様ならば、霞まん野辺もながめさせたまふべきを、いかにせんとのみ思しめされて、

野辺までに心ばかりは通へどもわが行幸とも知らずやあるらん

などぞ思しめし明かしける。（栄花物語、巻七　とりべ野、①p331）

三例目は三条天皇の皇后であった成子の葬送である。「これは様変りて」と言っている

13）『栄花物語』引用は新編日本古典文学全集(小学館)により、巻数と頁数を示す。以下同じ。

www.kci.go.kr

のは、彼女が火葬ではなく土葬であったためであり、実際には「雲霞」とはなっていないことになる。

> またの日の二日ばかりありて、宮の内侍、命婦などいふ人のもとに、「いかなる心地して帰りけん」など問ひたる返事に、
> 思ひやれ胸やはあくる音高み霊の夜殿の戸を閉ぢしより
> とぞいひやりける。雲霞とならせたまふも、げにいみじきことなれど、これは様変りていみじきことのさまなり。（栄花物語、巻二十五　みねの月、②p471）

四例目は後朱雀上皇追悼の贈答の中に現れる。贈歌の「野辺の霞」は荼毘の煙であろう。答歌の「春の霞」は後に残された自分のことを言っているものであるから、これは「立ち」との縁語による文飾と考えられる。

> 院うせさせたまひて、源三位の御もとに、皇后宮の弁の乳母、
> あはれ君いかなる野辺の霞にてむなしき空の雲となるらん
> 返し、
> 思ひやれおなじ煙にまじりなで立ちおくれたる春の霞を（栄花物語、巻三十六　根あはせ、③p341）

これらは恐らく『古今集』の八五七番歌を踏まえての表現であろう。半数近くが和歌の中に現れることからもそのことが窺える。先の拙稿及び本稿の「はじめに」の部分で指摘した例とは逆に、和歌世界では早くから見られた用法が、この頃になってようやく散文でも定着し始めているという現象が垣間見られるのではなかろうか。

また、これも『宇津保物語』に先蹤が見られたものだが、神仙世界を象徴する景物の一つとして用いられている例が、僧侶が山籠りに必要な品を貸してほしいと訴える手紙の一文の

> ……雲の上に響きのぼりて、月日の中にまじり、霞の中に飛び住まばやと思ひ立ちて、このごろ出で立ちはべるを、いづちまかれども、身を捨てぬものなれば、いるべき物ども多く侍る。誰にかは聞えさせむ。（堤中納言物語、よしなしごと、p503）[14]

である。これに加えて、新造の御堂での法華八講を描写する

> 底清く払ひなされたる池のおもて、みどり深う霞みわたりたるに、蓮の花のいろいろ開けわたりたるほど、まことに極楽の八功徳池の池もかうこそあらめと思ひやられて、涼しくいみじきに…（浜松中納言物語、巻三、p258）[15]

14）『堤中納言物語』引用は新編日本古典文学全集(小学館)による。以下同じ。
15）『浜松中納言物語』引用は新編日本古典文学全集（小学館）による。以下同じ。

www.kci.go.kr

の例や、法成寺薬師堂の遷仏の儀式を描写する

仰ぎて見れば、法性の空晴れぬと、希求の霞さす。楽の声、大鼓の音、げに六種に大地も動きぬべし。池に色々の蓮花並み寄りて、風涼しう吹けば、池の浪苦空無我の声を唱へ、諸波羅蜜を説くと聞ゆ。（栄花物語、巻二十二　とりのまひ、②p405）

の例も、この「神仙世界」の延長として、この世のものならぬ世界を描く道具立ての一つであろう。

『源氏物語』以後の作品群に於ても、やはり霞の一般的な属性やイメージの範疇に収まり切らない例が見られると言ってよいであろう。それでは、『源氏物語』に見られたが如き、いぶせき思い、むすぼほれたる心の表象とも言えるような例は認められるであろうか。次節ではそれを検証してみたい。

3．『源氏物語』以後② いぶせき思い

出でぬる名残も端つかたにてながめ臥したまへるに、空いたう霞みわたりて、月の光も少しおぼろなるを、涙にくもるにや。（狭衣物語、巻二、①p252）

愛する飛鳥井の女君の失踪・入水の顛末を知り、悲嘆に昏れる狭衣の姿を描く場面。「霞みわた」った空にかかる月が朧ろであるのは「涙にくもる」からであろうかと言っている。霞んでいる状態を「涙にくも」っていることと重ねているのであり、この風景は紛れもなく悲しみの心象となっていよう。

明けぬ前にと、急ぎ出でたまふとて、遣戸押し開けたまへば、暁かけて出づる月影ほのかにて、霞みわたりつつ、四方の山辺も心細く見えわたりたり。近き寺々の鐘の声々聞こえつつ、経の声ほのかに聞こゆなり。所のさまもをかしげなるに、物思はしくて、あまた年過ぐしけん心の中思しやるに、いみじうあはれなれば、とばかり眺め入りて、とみにも出でたまはぬに……（狭衣物語、巻三、②p62）

狭衣がその飛鳥井の女君失踪の事情を知る常盤の尼君（飛鳥井の女君の伯母）を訪い、彼女から詳しい事情と忘れ形見の飛鳥井の姫君の消息を聞いた翌朝、常盤の里の寂しげな様子を描写する場面である。この「月影ほのかにて、霞みわたりつつ」も単なる風景描写ではあるまい。長年ここで心細く暮らして来た飛鳥井の女君の心中を思いやり、「いみじうあはれ」に思った狭衣の目に映じた風景だからこそ、「四方の山辺」が「心細く」見えたのである。

www.kci.go.kr

……二所ながら、端にゐざり出でたまひつれば、名に流れたる曙の空霞みわたり、今開けそむる花の木末ども、似るものなきほどなるに、いにしへ、西山にて、「見しながらなる」とながめしほどの嘆かしさ、身の有様、「その折も、よろしうはあらざりしかど、過ぎぬるとなればにや、いとこのころの心地はせざりしをや」と、うちおぼしくらぶるに、え忍ばれたまはず、なにの折も、世とともに嘆かしかりつる年ごろの、この曙は恋しきことぞ、返るらむ波よりもしげきや。
朝ぼらけ憂き身かすみにまがひつついくたび春の花を見つらむ（夜の寝覚、巻四、p347・348）16)

自分に執心の帝の許から辛うじて逃れた寝覚の上は、継娘の宰相の上と共に、苦しいことばかりが多かった来し方を振り返り、それよりも辛いこの頃だと身の上を嘆く。そして歌の中で、そのような身の辛さ・はかなさがまるで霞のようだと言うのである。春の美しい風景の一つとして本文中に描写された霞が、歌の中では辛い思いの喩えとなっていると言えよう。

春の日の暮らしがたさは都だにあるを、まことにおほかた、鳥の音だにおとづれもせず、花の梢も霞のたたずまひも、世に知らず心細きをながめ給へる、まことに世をそむきて、ひとへに後の世のことを思ひ出でたらむ人は、たづぬべくもあるところのさまかな。（浜松中納言物語、巻三、p214）

夕暮れの空、いと深く霞みわたりて、内も外も人の音もせず、かすかにいみじきに、聖の、入相の鐘の声ばかりぞ聞こゆる。
奥山の夕暮れがたのさびしきにいとどもよほす鐘の音かな（浜松中納言物語、巻三、p216）

上記 2 例は共に吉野の山里を描写する。唐土で巡り逢い、愛し合った唐后を慕う中納言は、事情を知る吉野の聖を訪ね、更に唐后の母、吉野の尼君の許へも赴く。前者は本来、先の拙稿での分類に従えばＢの「春の美しい風景を描写するもの」に入るべきものなのであろうが、ここではそれすらも心細く見えるといっている。異国の地にある愛する人を思い、煩悶する中納言にとって、その人とゆかりの土地の風景は「心細」く「さびしき」ものであった。どちらの場面でも霞は、春の日のうららかな光景ではなく、山里の寂しさや侘しさを叙述するための道具立てとして機能している。

うち泣き給ひて、添へ給へりし琴をかき鳴らしつつながむれば、更けゆくままに、浮き雲たなびき、霞まされるに、つねよりも心くだくるねざめは、むなしき空に満ちぬる心地して、月の顔つくづくとながむるに、空に声のかぎり聞こえて、「河陽県の后、今ぞこの世の縁尽きて、天に生れ給ひぬる」と聞こゆ。（浜松中納言物語、巻四、p361）

これも同じ浜松中納言物語だが、病臥する唐后を夢に見て案じていた中納言に、彼女

16)『夜の寝覚』引用は新編日本古典文学全集(小学館)による。以下同じ。

www.kci.go.kr

が没したとの天の声が聞こえる場面である。「浮き雲たなびき、霞まされる」光景は、不安に苛まれながら過ごす中納言にとって「心くだくるねざめ」を齎す暗色の光景である。

> 世の常ならずいかめしき舟のさまも、ただおし出づるままに、はかなき木の葉ばかりに見え行く。はてはては雲も霞もひとつに消え行くまで、御簾を引き上げてながめたまふ御気色の、限りなく悲しきを……（松浦宮物語、一、p27）17)

遣唐副使として出発する息子氏忠を見送る母宮の姿。海の向こうに消える「雲も霞も」、母にとってはあまりに儚く、息子の身を案じる彼女の不安を弥増す元でしかない。

> かくて年もかはりぬれば、元日は朝拝などして、よろづめでたく過ぎもていくに、花の都はめでたきに、かの旅の御有様ども、「春や昔の」とのみ思されつつ、あはれに年さへへだたりぬるを、よろづいとおぼつかなく、あまたの霞立ちへだてたる心地せさせたまふ。（栄花物語、巻五　浦々の別、①p272）

この例は「心地せさせたまふ」とあり、比喩という点でDに分類すべきものかとも思われるが、元日という点から言ってこの「霞」も幾ばくかの具体性を帯びていよう。これは、叔父道長との政権争いに敗れ配所に送られた兄伊周・弟隆家の身を案じる皇后定子を描く文脈である。父・中関白道隆既に亡く、今や四面楚歌の彼女の不安に戦く心理を「あまたの霞立ちへだてたる心地」と言っている。この辺り、『栄花物語』作者は、先に見た『源氏物語』須磨巻の、源氏の須磨流謫を下敷きにしているようでもある。

> かくて奥山の御住居も、本意あり、心のどかに思されて、年も暮れぬれば、一夜がほどに変りぬる峰の霞もあはれに御覧ぜられて、「山里いかで春を知らまし」など、うちながめさせたまふに、一日の日も暮れて、二日辰の時ばかり、弁の君参りたまへり。（栄花物語、巻二十七　ころものたま、③p48）

これは出家を決意し長谷に籠る藤原公任の許に、息子の定頼が訪ねて来る場面。冬から春へ、一夜で変わる立春の霞を描くが、それを「あはれに」見ている公任の目には、その霞がいささか憂愁の色を帯びて見えている筈である。

このように見て来ると、『源氏物語』以後の作品群に於いてもやはり、いぶせき思い、むすぼほれたる心の表象とも取り得る例が認められると言ってよいであろう。

17）『松浦宮物語』引用は新編日本古典文学全集(小学館)による。

www.kci.go.kr

4．おわりに

以上見てきた通り、『源氏物語』以後の作品にも、一般的な「かすみ」「かすむ」の語の属性やイメージの範疇には収まりきらない例があることが確認できたかと思う。ここで筆者は先の拙稿での指摘を再び繰り返すこととしたい。これらは悲しみに昏れる暗く陰鬱な場面に配されたがため、いわば場面の必然性により偶然に暗色のイメージを帯びただけとも考えられる。従って「かすみ」「かすむ」に「悲しみの表象として描かれるもの」という新たな属性やイメージが加わったとまで言うことは避けたいと思う。ただ、そのような暗色の場面を描く道具立てとしても用い得るもの、そのように用いても場面の調和を破ることのないものであることは確かであろう。筆者が先の拙稿で指摘したのは、「かすみ」「かすむ」をそのように用いた点こそが『源氏物語』の新しさだったのではないかということであった。

続く本稿では、『源氏物語』より後に成立した散文作品を概観した。多少の先蹤を踏まえつつ『源氏物語』で新たな用法を獲得した「かすみ」「かすむ」の語は、後続の作品群に於いて更に多様な用法へと発展していったと考えてよいであろう。そしてそれは、同時代の和歌にこのような用法がほとんど見られないことから、おそらく散文独自の論理や必然性によって起こったものと考えられる。それがいかなる論理や必然性であるのかは当然それぞれの作品に帰せられるべき問題であり、今後の課題として、個々の作品毎のより綿密な検証が必要となるであろう。

またその一方で、茶毘の煙を霞に喩える例の如き、和歌世界では早くから見られた用法が、散文では『狭衣物語』や『栄花物語』に至って漸く採用されているという事実もある。和歌と散文の表現や用法がそのような共時的もしくは通時的な一種の「ずれ」を呈しているとすれば、そのずれを突き合わせて見ることによって、一つの事物が文学の中でどのように享受され継承されてゆくのかを、時代の変遷の中に位置付けながら俯瞰的に捉えることも可能であるかもしれない。このことについても、いずれ稿を改めて考えてみたい。

【参考文献】

·秋山虔編（2000）『王朝語辞典』、東京大学出版会、p112
·小島憲之（1990）「上代における詩と歌ー「霞（か）」と「霞（かすみ）」をめぐってー」『松田好夫先生追悼論文集　万葉学論攷』続群書類従完成会、p27-44
·横井孝（1987）「『源氏物語』の表現·断章ー「霞の衣」を中心にー」『静岡大学教育学部研究報告37』、p21-36
·片桐洋一（1983）『歌枕歌ことば辞典』、角川書店、p106-107

www.kci.go.kr

要 旨

平安朝の文学作品において、「霞」は一般的に春の長閑で駘蕩とした風景を描写する景物として理解されている。ところが散文作品においては、必ずしもそのような一般的理解の範疇に留まらぬ用法の例も間々見受けられるのである。神仙世界との関連において「霞」を描写したり、悲しくやるせない思いを描く場面に「霞」を配して比喩もしくは心象表現のように用いる、といった用法であり、早い例としては『宇津保物語』や『蜻蛉日記』にもその先蹤が認められる。しかし質･量共に群を抜いているのはやはり『源氏物語』であろう。この作品において「霞」は、先行作品を継承しつつ発展し、ついに死別の悲しみを描写する部分に配されるという、いわば「暗色の霞」とでも言うべき用法を獲得するに至っている。本稿ではこれらのことを踏まえた上で、『源氏物語』以後に成立した散文作品において「霞」がどのような種々相を呈しているかについて概観してみた。結果として、荼毘の煙の比喩として用いられるといった新しい様相をも見せつつ、やはり『源氏物語』の延長線上にある「暗色の霞」、いぶせき思い、むすぼほれたる心の表象とも取り得る例が認められるようである。多少の先蹤を踏まえつつ『源氏物語』で新たな用法を獲得した「霞」は、後続の作品群において更に多様な用法へと発展していったものと考えられるのである。

キーワード：かすみ、かすむ、『源氏物語』、『狭衣物語』、後期物語、心象表現

투　　고：2007.11.30
1차 심사：2007.12.08
2차 심사：2007.12.29

住　所：(302-735) 大田市西区桃馬 2 洞439-6　培材大学校　日本学科
電　話：011-9484-5768
e-mail：hirawiuwjm2003@yahoo.ac.kr

www.kci.go.kr